

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 山本 玲  
 (事業所) ラポールファーム  
 役 職：

### 【発表事業所の概要】

事業区分	就労継続 B
定 員	20 人
活動内容	クッキー・パウンドケーキ 下請け

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	男性 2 名 A さん・B さん
年 齢	50 代
障 害 の 種 別・特 性	A さんダウン症 B さん知的障害

### 【支援・活動事例の概要】

事例の あらすじ	<p>コロナ禍でマスクが不可欠となった作業所内で、マスクを全員付けることが当たり前のような空気の中、マスクをつけている利用者と、つけることが出来ない利用者の言い争いが始まる。追い打ちをかけるように、職員が「マスクをつけましょう」と促したことが、事を大きくしてしまった。職員間でも、強くいくべきか否かで意見が分かれているようで、対応に困っている事例。</p>
実際の状況	<p>マスクをつけている A さんが、つけない B さんをしつこく責めることで、他の利用者からも責められるようになってしまう。朝礼にて、決まりごとのひとつとして、マスク着用を毎日行ってきたことが、本当はマスクをしたくないと思っても頑張っている利用者の不満を爆発させてしまったようで、これは強制ではないかとの意見が職員間でも出始める。また声に出して注意することで、他の利用者の耳に入るのを、ジェスチャーで注意を促すこともやったが、どちらも効果なし。</p> <p>マスクをしない A さんは責められている状況。</p>
考察	<p>マスクが出来る利用者の思い。マスクができない利用者の思い。集団生活の中で、周囲に迷惑を掛けないために、また本人のためにマスクをつけるようにしたい職員の思い。正解はないが、混乱を招いた一因は職員たちの一貫性のない声のかけ方によるものと推測した。</p>
結果・課題	<p>今回はコロナ禍で表出したマスク着用だが、換気やソーシャルディスタンス等、生活様式の変化への対応は今後も続く。そうでなくとも、日々の生活すべてにおいて、初動の職員対応が利用者同士の混乱の一因になりうることを職員が意識し、事前に方向性や対応を協議するべき。</p>

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 法月聡子  
 (事業所) 安倍口作業所  
 役 職：

### 【発表事業所の概要】

事業区分	就労継続B
定 員	20名
活動内容	ドリンク販売 下請け

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	女性
年 齢	50代
障 害 の 種別・特性	気分変調症 回避性パーソナル障害 うつ病

### 【支援・活動事例の概要】

事例の あらすじ	作業所に通所と同時にグループホームに入居して7年が経過。当初はエネルギーが切れた時に動けなくなり、通所できない日もあったが、月日が経つにつれて、動けない日の方が長くなり、現在はホームで寝たきり状態の日が多い。自己肯定感が低く、他人の評価は耳に届かない。自分の理想が高く、そこに至らない自身にまた落ちこむ悪循環に陥っている。楽しみはアイスを食べること。やりたいことや希望が見いだせず死にたいと訴えることもある。
実際の状況	朝は耳鳴りや頭痛がひどくて動けず、買い物や掃除洗濯などは世話人が手伝っている。服薬で調子を戻そうと試みるが、副作用が大きく、調整が難しい。作業所への通所は無理強いしておらず、そこは本人も納得し、行かなくていいのは助かると言っている。「入院」と訴えるが、担当医師はそのまま長期入院してしまうことになるので、入院はさせない方向。 本人の一番の望みは「自宅に戻る」ことだが、高齢の母親も近いうちに高齢者施設に入所する様子なので、希望は叶わない。現在、ホームで生活できているのだから、このままでいいのでは？と問いかけるが、自分の劣っている部分や、理想としている生活に届かないことや、将来に対する不安が尽きず、自らを追い込んでいる。
考察	本人の望んでいる生活が叶わないことがわかっている中で、自分にとってどんな生活が一番良いのかを、本人主導で決めることは難しい状況。 今の生活は入院生活よりは自由で、世話人や作業所の職員がすぐにサポートしてくれる環境は決して悪くないと感じているが、それは周囲がそう考えているだけで、本人の思いには届かない。自己肯定感をもち、ありのままの自分を受け止めることが出来るようにするために、これからも成功体験を積んでいくことが必要なのか・・・
結果・課題	セルフケア・・・生活リズムを整えることで自立神経が整う こんなアドバイスも専門性をもって試みるが、当然気持ちに響かない。 50代という年齢、持ってしまった障害特性を考えると、本人のありのままを受け止め、望んでいる生活を一緒に探すことが、今考えられる最善ではないか。

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 速水千秋  
 (事業所) 牧之原市第2こづつみ作業所  
 役 職： 施設長

### 【発表事業所の概要】

事業区分	就労継続B
定 員	30人
活動内容	焼き菓子・資源回収 自動車部品の組み立て 施設外支援

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	女性
年 齢	38歳
障 害 の 種別・特性	高次脳機能障害 自閉症

### 【支援・活動事例の概要】

事例の あらすじ	<p>幼児期の交通事故により脳に大きなダメージを受け、高次脳機能障害、情緒障害を負う。小学校でのいじめを機に、強迫性障害やパニックやこだわりが強くなる。一般就職を試みるも採用には至らず、福祉事業所を転々として現在に至る。</p> <p>器用で作業は早いペースで取り組むが、仲間同士のトラブルが多く、それをきっかけに長期にわたり欠席が続いていた。通所のきっかけを作り、ボランティアとして受け入れ開始し、本人も気持ちよく通所していた。さらに、同じ事業所に通うOさんとの挨拶が励みになっていき、挨拶からハイタッチへ、ハイタッチから頬を触り「すき」と告白、徐々にエスカレートし、ついにマスクを取ってキスをしてしまった。口頭の注意だけで収まったが、Oさんの方が、こだわってしまう事態に陥っている。</p>
実 際 の 状 況	<p>この二人に恋愛感情はないが、例えばあったとしても、人を好きになったり、恋愛を禁止するようなことは事業所として考えておらず、Tさんには口頭で注意したことで、現在はそのような行動はないし、職員も二人を見守ることで今は収まっている。双方の保護者には報告をし、配慮が足りなかったことを謝罪した。</p>
考 察	<p>支援センターの担当職員に相談したところ、「事業所内での恋愛禁止」という決まりを設け、根拠を示す必要があるとアドバイスを頂く。現在は収まっているし、「好き」という感じを否定することは出来ないと考え、規則にはしないつもりでいる。</p>
結 果 ・ 課 題	<p>集団生活において適切な人間関係を形成できず、フラッシュバックにより他人を攻撃したり破壊するような行動が見られる中で「作業所に毎日来られてうれしい」と話すTさん。</p> <p>母親の希望でもある社会との繋がりを切らずに過ごすことが出来るように、これからも短時間であっても継続して作業所に通所出来るように支援したい。</p>

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 森藤明子  
 (事業所) ワークショップ り〜ふ  
 役 職： 施設長

### 【発表事業所の概要】

事業区分	生活介護
定 員	20名
活動内容	農作業 草木染 ハーブティ

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	男性
年 齢	40代後半
障 害 の 種別・特性	知的障害 自閉症 言語なし

### 【支援・活動事例の概要】

事例紹介	<p>り〜ふ在籍 15 年。表情の変化や感情表現が薄く、言語を含めたコミュニケーション手段がほぼない状態。こんなMさんとのコミュニケーション成立に取り組んできた事例。</p>
支援の実際	<p>Mさんの固執行動（トイレの便器を触ることやスムーズに帰宅が出来ない）並行して、そもそもコミュニケーションが少ない状態の2点を合わせて改善を図る支援を開始。本人と周囲（環境側）との間にルールを作り共有していった。本人が出来る動き（手を挙げること）の中からサインを作っていった。現在は、他者（スタッフ）と意識的にコミュニケーション場面（挨拶や要求の伝達）を作ることによって、表情に変化が見られ、また関わるスタッフの表情の変化も認識出来るようになったため、仕事に対する価値になっている。</p> <p>コミュニケーション行動が増えてくると同時に、固執行動も減少。しかし、しばらくすると別の行動に出たり、自己流に変化することは度々起っている。</p>
考察	<p>コミュニケーション手段が極端に少ない人や、感情や意志表出が薄い人も、自分の思いがあることを実感している。そこをどう引き出すか、支援者に委ねられてしまっている。</p>
結果・課題	<p>意思決定という大きな課題に取り組む前に、普段の日々の積み重ねである、本人との小さなコミュニケーションを私たちは築けているのか？うまく支援に入った後に、必ず起きる変化（別の行動や自己流）は彼らが次のステップに移りたいという「意思」ではないかと捉え、私たちがマンネリにならないように、彼らからのサインとして受け止めていきたい。</p>

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 森藤明子  
 (事業所) ワークショップり～ふ  
 役 職： 施設長

### 【発表事業所の概要】

事業区分	生活介護
定 員	20名
活動内容	農作業 草木染 ハーブティ

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	女性
年 齢	30代
障 害 の 種 別・特 性	知的障害 言語での会話可

### 【支援・活動事例の概要】

事例紹介	<p>小中学校は地域の普通学級で学ぶ。高等部より養護学校へ。卒業後一般就職するが、3年で退職し、生活の場所を含め転々とする。あちこちの事業所を利用していたが、どこでも職員や利用者とトラブルになり、事業所を移る事の繰り返し。4年ほど前に東京から移住する。本人は1か月程度で戻るつもりだったようで、1か月過ぎたころから非常に荒れる。</p>
実際の支援	<p>表面に現れている言動と本人のニーズに開きがあると感じたため、言動として表れていることに対する対応は出来るだけ避け、ニーズに働きかけるようにした。また、携帯電話がコミュニケーションツールではなく、不穏を助長する者になっていた。とても分かりにくい表れではあるが、関りの中で、徐々に携帯が不要なものと、本人が認識してきた。</p> <p>支援していく中で、日々の積み重ねや支援の積み重ねが難しいことがわかってきた。また予定の見通しが無いことへの不安や嫉妬など、全く関係ない言動で八つ当たりや不機嫌になることがあった。現在は事前に伝えたり、くぎを刺す事で、予定の見通しを立てやすくしたり、感情の爆発を最小限にしている。また良い状態が長くて3か月程度しか持続しないため、定期的にガス抜きをして極力爆発を避けている。</p>
考 察	<p>一見会話も成立し、丁寧に受け答えも出来るが、本人が話している内容が、本人の意思や想いと違っているという、困りごとがわかりづらい事例である。私たちが心掛けたことは、まず彼女自身を知ること、まだ現れていないニーズを知ること、その上で彼女自身の想いをどう表現してもらったらよいか。</p>
結果・課題	<p>支援が上手く積みあがらないことや対人関係が築けない背景に、環境や障害特性だけではなく、当然生育歴や家族との関係などの問題絡んでいることを考慮しながら、人に頼ること、信頼関係を作ることを意識して支援を組み立てていく。(育て直しとも言えるかもしれない)</p>

## 作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名： 瀧戸恵美  
 (事業所) ともの家  
 役 職： 施設長

発表者名： 三橋伸平  
 (事業所) ともの家  
 役 職：

### 【発表事業所の概要】

事業区分	生活介護
定 員	20名
活動内容	パウンドケーキ作り 販売・配達 ねじの下請け 音楽・製作・健康活動

### 【支援・活動対象者の概要】

性 別	男性
年 齢	20代後半
障 害 の 種別・特性	脳性麻痺 車椅子使用

### 【支援・活動事例の概要】

事例紹介	<p>仕事は集中して行い、大好きな余暇も笑顔が多く大きな声で参加している。大きな問題となる表れはなく、通所している。家族(妹)の入院がきっかけに、勝手にイメージを膨らませ、不安が募り、円形脱毛や家庭での不眠、不安定な様子が見られた。特に母親への風当たりが強く、睡眠不足と攻撃に耐えられなくなっていた。意思表示は、サインが多く、言語は不明瞭。日常生活で頻繁に使用し、且つ本人が気に入った単語は発信できる。その他はイエスカノーをジェスチャーで伝える。</p>
支援の状況	<p>「ともの家」では取り立てて困った様子は見られず、通常と変わらない生活をしていたが、原因は推測に過ぎず、家庭での様子とのギャップを問題と捉え支援を開始。本人の行動から考えられる思いを推測し、その思いを尊重し、寄り添うための支援を試みようと考えた。ひとつの手段として、仕事や活動の選択をしてもらうことにした。</p> <p>翌日の予定を決める際、2択提示をして選択をできるようにした。また翌日の予定を自宅リビングのホワイトボードに書き込み提示することを中止してもらう。選択していくうちに、実際の活動や作業が始まってから、予定していたものとは別のところへ自ら移動するという積極的な様子が見られた。ホワイトボードの記入がなくても、翌日を楽しみにしている様子が伺え、入院した妹も戻ったことで、徐々に家庭生活も安定してきた。</p>
考察	<p>イエス・ノーの確認だけでなく、何をやりたいとか選択する経験や周囲の仲間が意志表示している様子を通して、自分も想いを伝えてもいいのだとわかってきた。また自分で選んで決めて参加して楽しむ、本人が生活の主体になることに手ごたえを感じ始めているように見えた。</p> <p>また支援者側も、一つひとつの関わりにおいて、改めて丁寧に意思確認をする意識ができ、小さな行動の変化に気づくようになった。この支援者側の意識が、本人が安心して伝えられる環境になったと感じる。</p>
結果・課題	<p>現在も自分から参加したいところへ移動したり、意思表示を常に表せるわけでない。支援者が本人の表情や様子から推測しつつ本人の意思を確認することも多い。その繰り返しで、本人が意志を伝えることができ、思いを受け止められ、実現できたという経験を積み重ねていくことが出来ればと感じる。そうしたことがAさんの中に眠っているかもしれない、本当のねがいを共に作り上げていくことにつながるのではと感じる。</p>

<p>事例を通じて、意思決定支援について考えたが、今、行っている支援はまだ A さんの表面的に表れている意思に対する支援にすぎないのかもしれない。A さんの本当のねがいを A さん自身が育て、そして、私たち支援者がそれを理解するためには、本人が手ごたえを感じられる生活、仕事、余暇、仲間づくりを私たち支援者がしっかりと作っていかねばならないと改めて感じた。</p> <p>本人が伝えても良いのだと思えるような安心感や自信を持てるような他者や集団との関係性なども大切だと感じている。</p>
--